

令和6年能登半島地震における 災害派遣医療チーム(DMAT)としての活動

災害対策室長 吉永 敦史 (泌尿器科部長) (写真中央)

今年1月1日16時10分、石川県能登地方において最大震度7の地震が発生し、当院のDMATが出動しました。その際の活動報告をお伝えします。

出動までの流れとチーム構成について

石川県の要請により、DMAT事務局を経由し、埼玉県から派遣要請がありました。チーム構成は、医師1名、看護師3名、業務調整員1名の計5名とし、1月11日に参集先である石川県珠洲市の保健医療福祉調整本部に車両で向かいました。



参集先に到着するまで

発災から10日ほど経過してからの出発でしたが、依然として通行止めや渋滞、右写真のような道路の亀裂と陥没などの影響で、通常の倍以上の時間を要しました。



到着後の活動内容について

活動1日目の業務は横浜市の保健師チームと2箇所の避難所巡回でした。避難所では一人ひとりに問診を行い、医療ニーズの拾い出しを行いました。幸い問題(危機的・緊急)となるようなニーズはあがりませんでした。

活動2日目から4日目の3日間は社会福祉施設での活動でした。入居者の方々に、金沢市への空路及び陸路での避難を調整し、ヘリコプターまで搬送するなど、3日間で13名の避難が完了しました。また、新型コロナウイルス感染症が発生していた施設があり、そのスクリーニング(陽性者以外に罹患者がいないかの確認)を行いました。さらには、暖房器具が不足している施設に暖房器具を搬送するなど、幅広い業務に携わり、活動5日目に撤収となりました。

活動の振り返り、首都直下地震に対する備え

多くの犠牲者が出てしまったことは事実ですが、能登半島地震は割合的には受援者が少なく、支援者が圧倒的に多かったこと、また、県庁がある金沢市がほぼ無傷であったことは不幸中の幸いであったと思います。しかしながら、首都直下地震が起こった場合、圧倒的に受援側が多くなるため、支援が少なくなります。その場合、公助は全く期待できないと考えられます。大切なのは自助及び共助ですので、自ら備蓄を行い、家族内で有事に対する決め事を話し合っておくなど対策を立てておいてください。



○ おわりに

当院は、地域医療の中心的な病院として、専門的・高度な医療を提供すべく努力してまいりました。がんの治療も手術や抗がん剤、放射線などの治療だけでなく、その症状や精神的な部分に関するサポートも含め、今後

さらに充実に努めてまいります。このためにも、かかりつけ医との機能分化を図る必要があり、当院は紹介受診重点医療機関となりました。初診の方に紹介状の持参をお願いすることや、すでに当院に受診している方には今後「逆紹介」をお願いする場面もあるかと存じますが、ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

病院長 鎌田 成芳

